

チヨウサアの二面性

中山, 竹二郎

<https://doi.org/10.15017/2556550>

出版情報 : 文学研究. 33, pp.111-121, 1943-12-30. 九州文学會
バージョン :
権利関係 :



チヨウサアの二面性

中山 竹二郎

チヨウサアは典型的な客觀詩人であり、自己の感情をあらはに抒べることは概して稀である。しかし時をり彼は第一稱で自ら語つたり、また一群の人間像の中にまじる彼自身の姿を描いてゐる。たゞし斯る場合の「拙者」なるものや、一應は作者の自畫像として受取られる筈のものが、果して眞のチヨウサアその人であるか否かは頗る問題であつて、實際は之に對して否定的な答を與へねばならぬ場合が多いのである。といふのはチヨウサアが讀者に示すために自分を寫すとき、彼はまともな平板鏡を用ひないで、凸面鏡や凹面鏡や魚眼鏡といったやうな妙に歪んだ映像を結ぶ手法を用ひて、自分の性格とかけ

離れたり矛盾する印象を讀者に與へる癖がある。正直な讀者にとつては誠に迷惑至極な作者一流の癖であつて、讀者は作品の中でたまたま詩人の姿を捉へ得たとき喜んで眺めてゐると、本物のチヨウサアは之を尻目にかけ物蔭でにたりにたりと北叟笑んでゐるといつた有様である。まことにひとの悪い詩人である。

かうしたチヨウサアの自己曲歪の手近な例は『ギャンタペリ物語』の「序話」の中に出て来る修道僧と彼の對話の一節にも見られる。巡禮衆の中に雜つたチヨウサアはそこに一人の修道僧に逢ふ。此僧は遊び好きの男で、聖者の遺訓に従はず、戒律を守らず、只管狩獵の快味を

離れたり矛盾する印象を讀者に與へる癖がある。正直な讀者にとつては誠に迷惑至極な作者一流の癖であつて、讀者は作品の中でたまたま詩人の姿を捉へ得たとき喜んで眺めてゐると、本物のチヨウサアは之を尻目にかけ物蔭でにたりにたりと北叟笑んでゐるといつた有様である。まことにひとの悪い詩人である。

むさぼつてゐる。此日もチヨウサアに向つて「獵する者は篤信ならずとか、僧庵の外に在つては僧は水を出でし魚の如し、などといふ教訓は拙僧にとつては三文の價值もござらぬ」などと彼は恥らう氣色もなく揚言する。これに應じて

お説御尤と私は云つた(一八三行)

とチヨウサアはこの道心を失つた僧に合槌を打つてゐる。ウイクリフやラングランドの如き當時の憂世家が痛嘆してゐた教會の頽廢をこの場合チヨウサアは平然として是認してゐる如く見える一節である。しかしこれが果

してチヨウサアの本音であらうか。なるほど彼は人生の悅樂を味得した點では人後に墜ちなかつたが、一個の善良なカトリック信者としては教會の尊嚴清淨を念願し、殊に免罪僧や托鉢僧の如き宗門の中に巢喰つてこれを毒する輩に對してはやるせない忿懣をさへ感じた。(チヨウサアのやうに襟度の宏い詩人がものに憤激するとは、

實は彼らしくもないこのやうであるが、彼の作品のそこそこには藏しきれない憂憤のにちみ出るのを見るのである。)かう觀るとかの遊惰な修道僧の放言に應じて「御説御尤」と云つた彼の言葉は單純素朴な同感ではなく、實は諷刺と皮肉の表現である。そしてチヨウサアの皮肉は相當に複雑な構造を有つ諧謔に包まれてゐるので、慌たゞしい讀者には見落される場合が多いのである。かうした慌たゞしい讀者に與へる印象などを顧慮せずして、自己曲奎の諧謔の中に、にたりにたりと笑つてゐるチヨウサアはまことに太々しい男ではある。

チヨウサアは云ふまでもなく十四世紀の人である。歴史の通念から云へば、十四世紀は中世であり、中世は所謂「暗黒時代」であり、従つて文化度は低く、人心は素朴であつたらうと想像されやすい。果してこの時代がしかく單純であつたか否かはさておき、チヨウサアの性格が相當以上に複雑であつたらうといふ事は彼の閱歷を一

瞥したゞけでも容易に頷ける。彼は年少の頃からイギリス王室に勤め、黨争の絶えなき王族貴族の間に廷臣としての職を奉すること多年、その間出でて外國へ使し、フランスへもイタリアにも旅し、重要な國交問題に關係したり、機密情報にたづさはつたりした。また後にはロンドン港の税關吏に任ぜられて、生き馬の眼を抜くやうなロンドンの商人どもの闇貿易を摘發したりした。更にまた王室の土木事業や、地方貴族の森林のことなども司つた。要するにチヨウサアは純朴な單純なお人善しには凡そ勤まりそうでない職務ばかりを生涯の間與へられたのであり、此點からしても彼の性格の一斑を推知することができる氣がする。

それにも拘らずチヨウサアは極めて素朴な鈍重な人間のやうに讀者から考へられる場合が多い。これは彼が残してゐる自畫像——わざと歪めた自己描寫に原因するのである。人情の常として自己を美化したり擴大して畫き

たがる一般作家の場合と正反對に、チヨウサアは自分を卑小な者、魯鈍な男、常識を欠いた野暮天として讀者の前に示すことを躊躇しない。まことに奇妙な一種の韜晦と云ふべきである。後期の『キヤンタベリ物語』にもこの傾向は強いが、既に初期の作品『公爵夫人の書』の中にもその例が見られる。

この詩篇はランカスタ公爵の愛妻ブランシュ夫人の死を哭する動機から書かれたのであるが、この公爵はイギリス王族きつての有力者であり、かつは又チヨウサアの愛護者であつた關係上、この一篇は年若いチヨウサアにとつては謂はゞ桂冠詩人として、晴れの場合の作品と考へられるが、そこに描き出されてゐる作者の姿は如何であらうか。この詩篇には初期の作品に共通な夢の場面が描かれてゐる。愛する女人を失つて愁歎する喪服の青年騎士——これこそ公爵その人である——が夢の場面に出て来る。チヨウサアはこの騎士の悲しむさまを見て憐

みを感じてその事情を尋ねると、かの騎士はその婦人との戀のいきさつ、戀の遂げられし悦び、幸福なりし幾年かの結婚生活のさまを物語る。チヨウサアは騎士にむかひ「してその方は今何處にござりますか」と頓馬な問を發す。騎士は「悲しや、それぞわが失ひし人であり、君に語りし女性こそその人である」とあからさまに答へる。しかしチヨウサアは合點ゆかぬ態にて、「はてまあ、それは何のことでしょう」と云へば、騎士が今は更にあらはに「死んだのです」と言つて聴かせてもチヨウサアは未だ吞込めぬ様子。「いや、全くさうですよ」と重ねて斷言されてやうやく、「失はれたとはそれでござるますか、ほんにおいとしい事です」と初めて騎士に悔みを云つてゐる。「喪ふ」と「死ぬ」と同じ意味であることを此男に悟らせるには相當に手數がかゝつた。この血のめぐりの悪い男をチヨウサアは自分の姿として呈示してゐるのである。

『キャンタベリ物語』に於てもチヨウサア自身のみちめな影の薄い肖像が描かれてゐる。宿屋の亭主は巡禮衆にまちつてゐるチヨウサアを見つけて、彼一流の無難作な揶揄を彼に投げかけて、「君は誰かね、まるで兎でも搜すやうな様子で、地面ばかり見つめてゐなさるわい」(B・一八八五—六行)といふ。やがて此の亭主にうながされて物語をいくさりすることになる。チヨウサアはたつた一つ覺えてゐる韻文物語を申し上げませうと前置きして語り出したのがサ・トウパスの武勇傳の一節。この荒唐無稽の筋と稚拙な措辭には流石の亭主も耐えかねて、「後世だからそんなやぐざな歌は止してくれよ」と言ひ放つ。するとチヨウサアは怪訝さうに、「何故ですか」(B・二一一六行)と問ひ返すが、結局この物語は撤回して別な散文物語を語ることになる。

キャンタベリ巡禮の試みた物語はそれぞれの範疇に於て傑出したものが選ばれてゐる中に、チヨウサアが自分

に振り當てた「サ・トウパス」は當時のイギリス文學中、特に雅拙な、低俗な型に屬するもので、フランスやイタリアの先進詩壇の水準を志してゐたこの詩人にとつては、全く問題にならない愚劣な語り物であつた。選りに選つてそれを自分の出し物として、平然と、寧ろ得意げに語り、亭主から半疊を入れられても、「何故ですか」と合點ゆかぬ態にて問ひ返す程の魯鈍さ無趣味さを以てチヨウサアは自分の畫像を彩つてゐるのである。

かやうに歪められた、謂はゞ戲曲的な諧謔的な自畫像に現れたチヨウサアの性格をそのまゝ受取つてならないことは勿論である。海千山千の妖婦が生娘の恥かしさを裝つてゐるのである。凡そ素朴とは縁遠いもの、複雑な技巧や計畫的な布石がそこにあるのである。妻を失ひし悲愁の表現はこの情に最も鈍感な者の心にもそれを滲透せしむることによつて最大の効果を上げ得るであらうし、卑俗な物語の猥雑さはそれを自覺するだけの趣味性を欠

く人物をして物語らしめてその愚劣さを最も強調し得るであらうと考へられた。馬鹿や野暮天が作品の構成上の一要素と考へられた。そしてこの要素は作者自身の犠牲に於て與へられたのである。

かやうな自己曲歪の手法は恐らく作者と讀者との間の深い了解信賴がなくては行はれないのであらう。戲畫的な自己描寫を讀者はそのまゝ受取り、額面通りに評價することはあり得ないといふ信念が作者にあつてこそ、作者は安んじて諧謔化した自分を存分に描き出すことができたであらう。チヨウサアと彼がその作品を獻じた讀者との間の交遊關係とか、チヨウサアの當時の詩壇に於ける地歩がかゝる手法に不安を感じしめないほどの確實性を有つたであらうと考へられるのである。

今日傳はるチヨウサアの作品中隨所に見られる引用、暗示から判斷し、或は彼が種本として用ひたと想定され

る原典の數から推量して、チヨウサアは生涯多數の書物を讀んでゐたに違ひない。彼が詩作時の靈感は之を自然人生から直接に受けた場合よりも寧ろ書籍より得た場合の方が多きとさへ考へられるのである。彼は多くのフランス、ラテン、イタリヤの諸作家に詩作の題材を求めた。そして彼が愛讀したと推定される書物のリストは相當に長い。この愛書家としてのチヨウサアの自畫像をわれわれは彼の作品の中に發見するのは興味深いことである。

『善女傳説』の「序詩」の中で彼は自ら讀書を樂しむことを叙し「如何なる娛樂も書籍より我を引離し得ず」(三三—四行)と述べ、たゞ祭日と陽春の季節鳥歌ひ花咲く頃はこの限りならずと言ひ足してゐる(三四—三九行)。また『譽の宮居』に於けるチヨウサアは税關の職務に忙しい頃の自分を叙して曰く、「すぐ近所に住む人々の消息をさへ、あれこれ聞きませず一日の仕事を終り

勘定を濟ませて、休息もせず珍らしきを求めず、直ちに家路を急ぐ。歸りては石の如く黙々としてまた異なる書籍を讀む。はては視力衰へ隱者の如く生活す」(六四九—六五九行)。生涯あれほどの公務にたすきはりながら、チヨウサアは著作としてあれだけの量を殘してゐる。その著作は讀書の產物と云つてよい程歐洲古今の書物から題材を仰いでゐる。だから精力者なチヨウサアにしても「はては視力衰へ、隱者の如く生活」せざるを得なかつたのであらう。

ここにはしくも人間チヨウサアの性格の二面がはつきりと浮いて出て来る——良識的な實際家と、詩道に精進する書齋人とが一日の生活の中にそれぞれ活躍してゐる。また同じく『譽の宮居』の中に自ら「節制すること少し」(六五九行)と告白してゐるほど人生を飽かず享樂したであらうチヨウサアが反面に於て「隱者の如く」瘦せはるまで讀書に刻苦してゐる姿を見落してはなら

ない。かやうなチヨウサアの二面的な特徴は宗教や文學の畑にも跡附けられると思ふ。その一面のみを凝視して他の面を逸する讀者は歪んだ彼の面貌しか見ない危険に陥るのである。いまその二面性の現はれを二三拾つてみよう。

チヨウサアが篤信なカトリック信徒であつたことは疑ひない。初期の作品『エイ・ビー・スィイ』にはマリア禮讃の熱誠がこもり、『キヤンタペリ物語』中の聖セシリアの殉教聖話にしても、尼院長の語る少年殉教者の悲話にしても、またコンスタンス姫の受難物語にしても、

作者のカトリック信者としての敬虔さがにじみ出てゐる。『キヤンタペリ物語』の跋文中で作者が舊作の中で猥雑な題材を取扱つた罪の赦免を乞ひ、キリストと聖母と在天の諸聖に捧げた祈願も純真である。且つまたチヨウサアは教會を是認して、個人的判斷を主張するウィク

リフの異端に與しない。しかし彼は教會内部の腐敗に對しては痛憤措く能はざる底の熱情を藏してゐて、修道僧、托鉢僧、免罪僧、召喚吏などいつた手合ひに對しては辛辣な現實曝露を試みて筆誅を加へてゐる。當時流行の煉金術も多くは僧侶階級の手で行はれ、不正行爲が之に伴つたので、チヨウサアはこの術の種明しをして此等の輩に鐵槌を加へてゐる。チヨウサアが教會に反抗してゐる如く考へられるのは、彼が教會關係者の敗徳を慨歎してゐる一面のみを見るためであり、敬虔篤信な彼の一面を見忘れてゐるからである。

チヨウサアは伊太利文藝復興の前驅的詩人ベトラルカやボカアチオの影響を最も早く受けた詩人である。彼は既にルネサンスの雰圍氣を感得した。その一の現はれとして彼の作品には人間的感興の表現が鮮明であり、人間個性に對する探求が根強い。初期の作品で、フランス詩

壇の傳統に従つたもの、中には概念的な定型的な人間像が屢々見られるが、後年イタリヤ詩歌を知つてからのチヨウサアは現實を背負つてゐるなまなましい人間の姿を捉へることを力めた。これはキャンタベリ巡禮の一人一人に對する詩人の鋭い觀察を見れば容易に領ける事實である。群り集る男女の息吹を間近に感じ、その體臭を嗅ぐほどの現實性を讀者はそこに感ずるのである。下司で粗暴な粉屋のおやぢ、人を喰つてゐる貪慾な免罪僧などの姿は容易に讀者の腦裏から消えない。殊にサザックの宿屋の亭主とバアスの町から來た年増女との性格に至つては驚くべき眞實性を以て描寫されてゐる。恐らくこれはチヨウサアの描いた人間像の最傑作であり、シェイクスピアに於けるフオオルスタアフやマクベス夫人に匹敵するものであらう。かうした例で知られる如く、チヨウサアの洞察眼の最も徹してゐるのは人間生活の卑小な俗庸な面であつて、此點近代自然主義文學の傾向と相似

たるものがある。浪漫文學が面を背けて見まじとするものをチヨウサアは凝視する。『キャンタベリ物語』に煉金術士とその助手が巡禮一行の後を追うて馬を走らせて來る場面がある。乞食非人のやうなむさくるしい男が踏馬に乗つて息せき切つてやつて來るのである。見れば人も馬もびつしより汗に濡れてゐる。チヨウサアはこれを眺めることを「驚異」(G・五六〇行)と感じ、「喜悅」(同五七九行)と感じた。マリヤの信仰に篤く、聖者の奇蹟を信じ、占星學に長じたこの中世詩人は半面に極めて近代的な感覺を豊に持つてゐた。

かやうに人間生活の卑賤な面に深い感興を寄せ、匹夫匹婦の渡世のさまを好んで取扱つたチヨウサアが他方に於て宮廷詩人であつたことは、また彼の二面性の現はれでなくて何であらう。彼は生涯イギリス王室やランカスタ公家とは密接な關係があり、詩作の動機から云つても

王族貴顯の身邊に起つた事件に取材した作品が多い。

『公爵夫人の書』はランカスタ公爵夫人の死を弔するため、『百鳥の集ひ』は國王成婚の奉祝のため、『善女傳説』はアン王妃に獻呈するためであり、その外リチャード二世に奉つてこれを戒めた短詩や、ヘンリ四世に身の窮迫を訴た詩も残つてゐる。従つてかうした詩はその題材も典雅なものが多く、夢と寓喩の手法によつて市民の日常生活からは遠く離れた世界を描いてゐる。この世界と、キヤンタベリ巡禮の世界とは全く對蹠的であり、作者が宮廷詩人から民衆詩人へと轉落したかの如き觀があるが、實際にはチョウウサアの中に桂冠詩人の素質と共に、「貧者の友」ラングランンドにも優る庶民への關心理解が豊にあつたのである。

彼の二面性のまた他の現はれとして、創作に於ける作者の態度が問題となる。それは何かと云へば、彼が所謂

文學の純粹性を主張し標榜してゐるに拘らず、他方に於て文學は宗教に奉仕すべきであると解される外はないやうな宣告を發して、讀者を煙に卷いてゐる事實である。

『キヤンタベリ物語』の「序話」に於て、チョウウサアは巡禮衆を讀者に紹介したつてから、彼はこれら善男善女の物語を書き傳へんとする作者の態度を明にして、「他人の物語を傳へ語らんとするものは、それが如何ばかり粗野であり猥雑であらうとも、でき得る限り一言一句原のまゝ傳へねばならぬ、さもないれば彼の物語は虚偽となる。」(A七三一—四行)と云ひ、兄弟の間と雖も斟酌すべきに非すと附言して、近代自然主義文學のそれと酷似してゐる嚴正な客觀主義文學の立場を唱道してゐる。

しかもこの主張は『キヤンタベリ物語』を通じて實踐されたのである。語り手の性格や環境に應じ、語りものの内容はそれぞれに變り、崇高な殉教物語や抹香臭い道話、さては華やかな戀愛物語が語られるかと思ふと、そのあ

ひだには罪惡を主題とした世話ものや、尾籠な痴情譚なども雜つて出て來るといつた有様で、作者はその標榜した主義を忠實に實踐しつゝこの物語集は未完ながら一應の結びをつける段まで來る。

しかるにその末尾にあたつてチヨウサアは讀者に告別の辭を述べてゐる。その中で彼はこれまで「世俗的なよしなきこと」を翻譯創作したことを罪惡と觀じ、キリストの赦免を祈願し給へと乞ふてゐる。この「世俗的なよしなきこと」の書の中には『トロイラス』や『譽の宮居』や『百鳥の集ひ』などの舊作の外に『キャンタベリ物語』の中に含まれてゐる「罪惡に關する物語」が擧げられてゐる。反之ポイシアスの翻譯とか、聖者傳説、説教集、道德信仰の書を物し得たことを彼はキリストや聖母に感謝してゐるのである。この所謂チヨウサアの「取消文」なるものは讀者にとつては全く意想外の告白である。茲では彼が生涯の文學的勞作の大部分が棄卻さ

れ、その客觀主義も、その純粹文學の立場も否定されてゐる。そして是認されてゐるのは宗教に奉仕する文學のみである。

はたして此跋文に於けるチヨウサアの告白が彼の本音であらうか。はたして生涯の精進によつて歩み續けて來た彼の文學道も虚妄に過ぎぬといふ諦悟に達したのであらうか。この問題を徹底的に闡明するためには傳記的材料が不足してゐるので、如何なる環境の下にこの「取消文」が草せられたかを知る由もない。察するに畢生の大著『キャンタベリ物語』の完成を見ずしてチヨウサアは重患に罹り、再び筆を執ることのできないのを悟つたとき、謂はゞ臨終に於ける遺言狀として件の「取消文」を草したのではなからうか。常に寛裕にして迫らないチヨウサアの心境も病間やゝその均衡を失し、宗教的情操が平素の文學者的信念を抑壓した刹那の氣分がかの跋文となつて表現されたのではなからうか。いづれにしても常

に複雑の中に調和を保つてゐたチヨウサアの性格の諸ゝ
の現はれのうち、ある一面が他の一面の犠牲に於て強調
された稀な例であり、これが彼の吐いた本音であるか否
かに對しては、肯定もされ同時に否定もされるのではな

からうが。

とにかく、人間としても、詩人としても、一筋縄では
把握できないチヨウサアの性格ではある。